

先日、知人からのちょっとした問い合わせがあって、エディット・ピアフの「Mon Dieu(私の神様)」という歌の矢田部道一さんの訳詩を調べた。私が歌を気に入る時は何語であろうと原語の流れを気に入るので、まずその通りにしか口ずさまない。したがって他人の訳詩は皆無に近いくらい知らない。そこで矢田部さんの詩を聴いて「氏は何故あのように訳されたか？」と考えた時、「成程」とひとつの解釈が浮かんだ。

「Mon Dieu」という連呼で始まるこの歌は、文字通り訳せば「ああ、神様！」というすがすがしい気持ちである。しかしこの「Mon Dieu」という言葉には「私のアイドル(偶像)」「崇拜する人」という意味もある。矢田部さんの訳詩はこちら側がベースだろうと思われる。何せ「歌詞」というものは短い。助詞が抜けた単語羅列という歌詞も少なくない。表だった訳は統一できても、内面方向から心情的解釈が浮かび上がるのは当然のことだ。この「Mon Dieu」にも大きく分けて二通りの解釈が浮かぶ。つまり「天の神様」という解釈がある一方で、ピアフが「崇拜的に愛した人＝マルセル・セルダン＝私の神様」という解釈も成り立つ。そこで二通りの訳を以下に示してみよう。

まずイタリア・マフィアの銃弾と敬虔なカソリックの冷徹な視線を浴びたくなければ、神と人間を混同してはならない。従って文字通り「神様に祈る」訳をする。『愛の讃歌』の歌詞や遺品のクロスに見て取れるように、ピアフも実際に祈っただろう。

『神様、神様、神様！私に残しておいてください。もう少しだけ、私の愛しい人を。1日、2日、1週間...私にお与えください。もう少しだけ、私を助けてください...愛し合い、言葉を交わし合うための時間を、思い出の数々を作るための時間を、神様、どうか...神様、私にお与えください。私の人生をもう少し有効に使わせてください...。神様、神様、神様！私に残しておいてください。もう少しだけ、私の愛しい人を。6か月、3か月、2か月...、私にお与えください。1か月でもいい...。歩き始める、あるいは締めくくるための時間を。光りを見出す、あるいは受け入れるための時間を。神様、神様、神様！もし私が間違っているとしても、もう少しお与えください...。もし私が間違っているとしても、それでも、どうかお与えください...』

そして次に、矢田部さんの訳詩を踏まえて「Dieu」を「崇拜する恋人」として訳す。『愛する人、愛しい人、恋人！私に時間を与えて。もう少しだけ、愛しい人。1日、2日、1週間...時間を与えて。もう少しだけ、私に...。愛し合い、語り合う時間を、思い出を作る時間を、あなた、どうか...愛しい人、私に時間を与えて。私の人生を価値あるものにしたいの。愛する人、愛しい恋人、あなた！どうか私に時間を与えて。もう少しだけ、愛しい人。6か月、3か月、2か月...、時間を与えて。1か月でもいい...。始める、あるいは終わりにするための時間を。輝く、あるいは苦しむための時間を。愛する人、愛しい恋人、あなた！もし私が間違っているとしても、もう少し時間を...。もし私が間違っているとしても、それでも、どうか時間を...』という、訳詩通り「このまま一緒に暮らしたいの」という内面的情熱の解釈が成り立つ。こう考えた時、矢田部さんは随分女心を深く読んだ方だったのだなあ、と思う。

ところでヒンドゥー教ではないのに、ピアフが歌う神様が日本に来ると牛になるような気がするのには錯覚だろうか？モオオ～デュ～！...Mon Dieu(ああ)！ (2013.4.4)